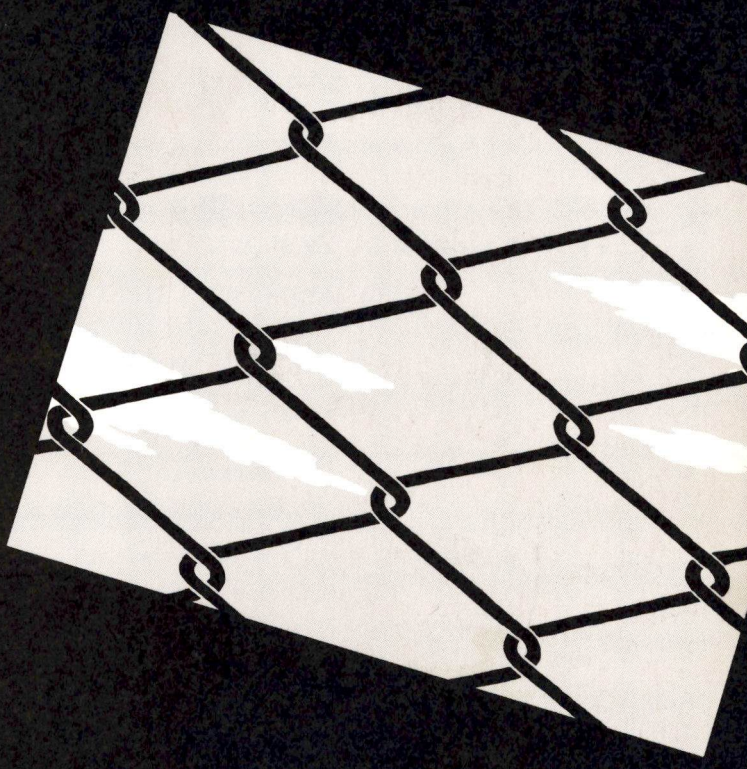
アマチュアオーケストラ

新交響楽団第124回演奏会



カオスから幽冥（エルボス）と暗い夜が生じた
つぎに夜から澄明（アイテル）と昼日（ヘメレ）が生じた
夜が幽冥と情愛の契りして身重となり
生みたもうたのである

ヘシオドス―神統記より―（岩波文庫）

神よ、わたしをお救いください
大水が流れ来て
わたしの首にまで達しました

わたしは足がかりもない深い泥の中に
沈みました
わたしは深い水に陥り
大水がわたしの上を流れ過ぎました

詩篇69―ダビデの歌より―

指　　揮：今村　能
オーケストラ：新交響楽団
合唱総指揮：田中　信昭
混声4部ソロ：永石　菊乃(sop)
　　浜田　理恵(sop)
　　安孫子奈穂美(alt)
　　小畑　朱実(alt)
　　植木　紀夫(ten)
　　田中　孝男(ten)
　　佐野　正一(bass)
　　谷　　篤(bass)
混声合唱：合唱団 OMP
児童合唱：東京少年少女合唱隊
語　　り：児童(児童合唱より1人)
　　女性(混声4部ソロより1人)
　　英語　ジョン・ブロウカリング
　　(新交響楽団チェロ奏者)
P A・録音：㈱フォンテック
1989年7月23日(日)サントリーホール 2:00 p.m.

アマチュアオーケストラ
新交響楽団第124回演奏会

シューマン：交響曲第４番ニ短調

Robert Schumann：Sinfonie Nr. 4 d-moll

―― 休　憩 ――

細川　俊夫：ヒロシマ･レクイエム

Toshio Hosokawa：HIROSHIMA REQUIEM(1988/89)

――語り手(３人)、声楽ソリスト(４あるいは８人)、混声合唱、
児童合唱、テープ、そしてオーケストラのための――

for Speakers(3), Solists(4 or 8), Mixed Chorus,
Children's Chorus, Tape and Orchestra

Ⅰ章：〈前奏曲･夜〉

――オーケストラのための――

Ⅰ：〈Preludio - Night〉 for Orchestra

Ⅱ章：〈死と再生〉

――語り手、声楽ソリスト、混声合唱、児童合唱、そしてオーケストラのための――
テキスト：『原爆の子』長田　新編(岩波書店)
死者のための典礼(ラテン語)より

Ⅱ：〈Death and Resurrection〉
for Speakers, Solists, Mixed Chorus, Children's Chorus, Tape and Orchestra
Text：Children of the A-Bomb by Dr. Arata Osada

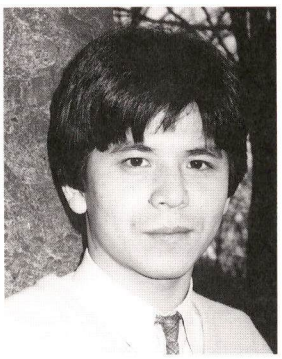
1989年７月23日(日) ２：00 p.m.

サントリーホール

主催：新交響楽団

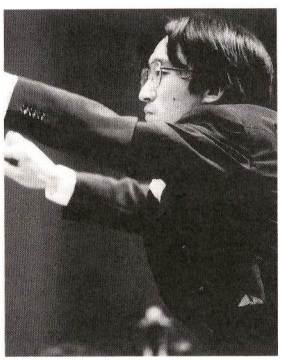
㈶三菱信託芸術文化財団助成公演

細川　俊夫 ――作曲者プロフィール



1955年、広島に生まれる。
1976年より82年まで、ベルリン芸術大学作曲科において、尹伊桑に師事する。
1983年よりフライブルグ音楽大学において、クラウス・フーバー、ブライアン・ファーニオーに師事。
1980、82年度、ダルムシュタット現代音楽夏期講習会に参加、作品を発表する。
1980年度、ブッキ国際作曲コンクール（ローマ）において、フルート、ヴァイオリン、チェロのための「序破急」が第1位入賞。
1982年、第3回入野賞受賞。同年、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団創立100周年記念の作曲コンクールにおいて、オーケストラのための「プレリューディオ」が第1位入賞。ベルリン・フィルより、定期公演で初演されるオーケストラ作品の委嘱を受ける。
国立劇場、スイス・ロマンド管弦楽団、ワルシャワの秋、ヘルシンキ・フィル、アルディティ弦楽四重奏団、ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル、東京カルテット等により近作が演奏された。
1987年“ジュネーヴの夏”においてオーケストラ作品を含む5曲が演奏された。
1988年、ダヴォス国際音楽祭に招待される。
日本のみならず、全世界で注目を集めている作曲家である。
1988年、クフモ音楽祭招待作曲家
1988年、京都市音楽賞、同年CDアルバム「ペル・ソナーレ」（フォンテック）レコードアカデミー賞受賞、
1989年、尾高賞を受賞。

今村　　能 ――指揮者プロフィール



1954年1月29日　大阪生。
東京・玉川学園に学ぶ。
1976年3月　国立音楽大学卒業
1977年11月　カラヤン・コンクール・ジャパン第3位。
1978年3月　桐朋学園大学指揮科研究生修了。
1978年9月より1981年2月までカラヤン・アカデミーに籍を置き、研鑽を積む。（ベルリン・ザルツブルク）
1980年5月より“ベルリン・フィル12人のチェロ奏者たち”の練習指揮者並びにレコーディングの指揮を行う。
1980年7月　グィド・カンテルリ記念指揮者コンクール・ファイナリスト（於ミラノ・スカラ座）
1980年7月　グィド・カンテルリ・コンクールの一環として、ミラノ・スカラ座管弦楽団、ミラノ・イタリア放送交響楽団とコンサートを持つ。
1981年7月より東京アカデミー合唱団指揮者として合唱団の育成に力を注ぐ。
1981年12月　NHK・テレビオペラで活躍。
1982年4月・5月及び1983年4月　キングレコード・ファイヤーバードレーベルへLP 8枚をレコーディング。（東京佼成ウィンド・オーケストラ）
1983年6月　武満　徹氏企画　Music Today '83「今日の音楽・11」で、フランソワ・ベルナール・マーシュ作品演奏会を指揮し絶賛を博す。
1983年12月　ポーランド・カトヴィッツェで開かれた第2回フィテルベルク国際指揮者コンクールに優勝。特別賞を受賞。（最優秀オーケストラ伴奏賞）
現在、日本各地のオーケストラ、およびポーランド、フィンランドはじめとするヨーロッパを中心に指揮活動を行っている。
これまでに、ヘルベルト・フォン・カラヤン、フランコ・フェラーラ、ミラン・ホルヴァート、小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明、高階正光の各氏に師事。

出演者プロフィール

●合唱総指揮

田中　信昭

1928年東京生まれ。56年東京芸大卒業と同時に東京混声合唱団の常任指揮者となる。声楽をネトケ・レーヴェ、指揮法をクルト・ヴェスの両氏に師事。58年オーストリア、65～66年アメリカ、ドイツ、イタリアに留学。現在は東京混声合唱団常任指揮者として活躍。特に日本の作曲家と協力して新しい日本の合唱音楽の創造に尽力している。桐朋学園大客員教授、東京芸大講師。

●混声4部ソロ

永石　菊乃(ソプラノ)
東京芸大大学院修士2年在学中。読売新人演奏会に出演。NHK・FM新人洋楽オーディション合格。東京文化会館推薦音楽会出演。関西フランス音楽コンクール2位入賞。稲畑賞、朝日放送賞受賞。中村浩子氏に師事。

浜田　理恵(ソプラノ)
東京芸大大学院修士3年在学中。83年全日本学生音楽コンクール全国大会第1位入賞。88年日仏声楽コンクール第2位入賞。89年ドビュッシー歌曲による第1回リサイタル開催。中村浩子、児島百代の各氏に師事。

安孫子　奈穂美(アルト)
東京芸大大学院修士2年在学中。全日本音楽コンクール東日本大会2位入賞。鎌倉市学生音楽コンクール鎌倉市議会議長賞受賞。戸田敏子、児島百代の各氏に師事。

小畑　朱実(アルト)
東京芸大大学院修士2年在学中。84年全日本学生音楽コンクール全国大会第1位入賞。安宅賞受賞。NHK・FM新人洋楽オーディション合格。瀬山詠子氏に師事。

植木　紀夫(テナー)
東京芸大卒。現在同大学別科在学中。86～87年渡独、シュトゥットガルト国際バッハアカデミーに参加。バロックの宗教音楽、特にシュッツやバッハ、モーツァルトのミサ等の演奏会に出演。原田茂生、高丈三、兵藤豪希の各氏に師事。

田中　孝男(テナー)
島根大学特音課程卒。東京芸大卒、同大学院オペラ科修了。芸大オペラ・モーツァルト「皇帝ティートの慈悲」でデビュー。中村健氏に師事。

佐野　正一(バス)
東京芸大大学院修士3年在学中。東京文化会館推薦音楽会入選。日伊声楽コンコルソ入選。日本音楽コンクール入選。伊藤亘行、三林輝夫、佐野光政、吉岡巌の各氏に師事。

谷　　篤(バス)
東京芸大大学院修了。87年よりオペラシアターこんにゃく座の公演に出演。87年日本歌曲による第1回リサイタル。88年「冬の旅」による第2回リサイタル。伊藤亘行、高橋大海、三林輝夫の各氏に師事。現在東京芸大助手。

●混声合唱

合唱団 OMP
音楽監督の栗山文昭氏のもと、東京近郊より集まる社会人、学生を中心としたアマチュア合唱団。1976年、三つの合唱団の頭文字O、M、Pをとり、各三団体と並行して活動を始め、1981年、合唱団OMPとして独立。新しい合唱作品の委嘱初演活動を中心に、レコーディング、テレビ出演、合唱コンクールへの参加、地方演奏旅行と、幅広く意欲的に活動している。今年6月に行なわれた定期演奏会では合唱劇にとりくみ好評を博した。これまでの委嘱作品には、青島広志（編曲）「泰西名歌集」(1983年)、西村朗「まぼろしの薔薇」(1984年)、新実徳英「海の記憶」(1985年)、三善晃「交聲詩　海」(1987年)、新実徳英・青島広志「子供の十字軍」(1989年、改訂版委嘱)がある。
音楽監督の栗山氏は、彩の会、コーロ・カロス、千葉大学合唱団等、多数の合唱団の指揮者として、その活躍が注目されている。1987年全日本合唱コンクールにおいて、合唱団OMPを率いコンクール大賞受賞。東京都合唱連盟理事長。全日本合唱連盟理事。日本合唱指揮者協会理事。東京コンセルヴァトアール尚美講師。東京室内歌劇場会員。

●児童合唱

東京少年少女合唱隊
1951年、故ポーロ・アヌイ神父と長谷川新一のもとに、30名程の少年たちでスタートした合唱隊も、今では約100名の少年少女によって構成されています。又修了生も3つのグループに分かれて練習や演奏に励んでいます。各グループとも練習内容は一貫し、グレゴリオ聖歌からルネッサンス、古典合唱曲を中心に、ポピュラーから現代曲まで幅広いレパートリーを持っています。
テレビ出演、レコーディング、国内演奏旅行の他、1964年のアメリカ・カナダ公演を皮切りに海外公演も数多く行っています。
1971年、長谷川冴子が常任指揮者に就任し、その後も活動を拡げ、昨年は第9回海外公演として韓国を訪れ、KBS児童合唱団との日韓親善演奏会を行いました。今夏は、イタリア・英国聖堂コンサートを実施し、ローマ法王ヨハネ・パウロⅡ世に謁見、合唱を披露するという素晴しい機会を与えられました。

シューマンの管弦楽法についての私見

石川　淳一(ヴィオラ)

シューマン：交響曲第４番ニ短調

楽器編成：フルート２、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン４、トランペット２、トロンボーン３、ティンパニ、弦５部

シューマンの管弦楽曲は、その独自性のために敬遠されることが多い。たとえば、弦楽器と木管がいつも重なっているとか、金管の厚塗りなどということはよく指摘されることである。いわゆる「重厚で墨絵のような」と表現される批評である。そのためマーラーなどはオーケストレーションに手を加え、それが今日に至るまで容認されている部分もある（シェーンベルクはこのことをシューマンの独自の音色をないがしろにするもの、としている）。確かに違う響きがするのである。しかし、それがシューマンのものであり、シューマンが感じた響きそのものなのである。ところで「重厚な」響きというもののとらえられかたは当時と現代とではかなり違うと思われる。つまり、実際に聞くあるいは聞かれた音の響きが違うのである。

第４交響曲が作曲された1841年は、いわゆるシューマンの「管弦楽の年」である。第１交響曲、序曲・スケルツォ・フィナーレ、ピアノ協奏曲、などが作曲されている。クララとの結婚後、ライプツィヒでの生活が1844年まで続く。この交響曲第４番（作曲順では２番目の交響曲）の初演もライプツィヒのゲバントハウスで行なわれた。

ライプツィヒ・ゲバントハウス管弦楽団は、当時世界最高の（文字どおり、世界で唯一無二の）オーケストラであった。音楽監督にメンデルスゾーンをいただき、華々しい活動をしていたのである。

ところでこのオーケストラの楽器編成はどのようなものだったろう。1839年ゲバントハウス管弦楽団は創立50周年を記念した後、オーケストラの規模を大きくした。そのときの記録によれば、ファーストヴァイオリン８人、セカンドヴァイオリン８人、ヴィオラ４人、チェロ３人、コントラバス３人、フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン、トランペットが各２人、それにティンパニの計39人であった。これに特殊楽器（トロンボーンなど？）を演奏する人が数名いた。これが現在とほぼ同じ編成になるのは実に40年以上も後のことになる。ちょうどマーラーの時代である。

これが現在のオーケストラがおりなす音とはどれだけ違うことか。今、標準的なオーケストラの編成はファーストヴァイオリン16人、セカンドヴァイオリン14人、ヴィオラ12人、チェロ10人、コントラバス８人といったところだ。もちろん管楽器は昔も今も変らない。弦楽器が２倍以上になったにもかかわらず。したがって巨大化した現代のオーケストラではそれぞれの楽器の音を聞かせることは至難の技なのである。これが当時のオーケストラでは全体の音量は大きくないかわりに、実に風通し良く各パートの音色が聞こえてくるのである。

現代のオーケストラではバランスを考えて演奏しなくてはとてもシューマンの正しい響きは出せない。つまり旋律線（様々な楽器が一度に飛びかかる）を浮き立たせて、伴奏をおさえる、その微妙な計算がシューマン演奏の成功の秘訣となっているのだ。しかし、当時のオーケストラでは風通しが良いために伴奏の分離はもちろんのこと、厚く重なった旋律線までもがはっきりと聞き分けられたであろう。

第１交響曲が４日で書き上げられたことでもわかるようにシューマンにとって作曲とは瞬間的な燃焼であった。つまり最初に全体があったのであろう。したがって音色とか響きとかはすべて頭の中に描かれていたに違いない。すなわちこれは決して「間違った」響きではないのである。そしていま考えるように混乱した響きではなかったであろう。

ところで私は本日ヴィオラを演奏しております。演奏する身にとってなによりつらいのは「休みがない！」ことです（実際譜めくりする暇もない）。そしてヴィオラといえば伴奏中の伴奏、伴奏の王者といわれております（ただ旋律が少ないだけ）。このため第２の泣き所、キザミが多くなります。その結果、「腕が疲れる」という現象が発現いたします。しかもこの第４交響曲は楽章の切れ目がない、ということをウリモノにしておりますから休む暇なく、おまけに調弦が狂うと後ろ指さされたまま曲が終わってしまいます。しかしウィーンフィルになったつもりでつい、一生懸命にやっております。

では、良心的な演奏で知られる新交響楽団のシューマンをこころゆくまでお楽しみください。

「ヒロシマ・レクイエム」について

細川　俊夫

この作品は、新交響楽団の委嘱作品として、1988年の秋から1989年の６月にかけて作曲しました。これまでの僕の作品のなかで、最も大きな編成の作品です。

「ヒロシマ」をテーマにした作品は、もうすでに10年以上も前から、心にあたためていました。僕が初めて、ヨーロッパに渡って、勉強をはじめたころ、ヨーロッパの新しい仲間たちは、僕の生まれをきいて、僕が「ヒロシマ。」と答えると、けげんそうな顔をして僕の顔をまじまじと見るのです。彼らの多くは、「ヒロシマ」は、「アウシュヴィッツ」という名と同じく20世紀の最大の悲惨の場所なのでした。そして、多くの人はヒロシマにはもう緑もないし、人々は住んでいないとさえ思っていました。僕はヒロシマが瀬戸内海とデルタ地帯の河にめぐまれた美しい都市で、僕の少年時代は、山と河、そして海にかこまれたどんなに美しいものだったかを、語るのですが、だれも信じてくれませんでした。

考えてみると、僕は子供のころ、ヒロシマの悲惨を知ってはいたものの、それがいったいどういうことなのか、考えてみることはありませんでした。僕は、あの悲惨から10年後に生まれました。家族のものには被爆した人もいました。その地獄絵のような世界を、両親はあまり多くは語ってはくれませんでした。母や祖母は、あの時、あのおそろしい世界をその場におりすべて見ていて、体験したのです。それを語らなかったのは、僕たちに対する愛情と、あんな地獄はもう二度とみたくない、思いだしたくないという祈りをこめた深い願いからでした。

1983年に僕はワルシャワでコンサートがあり、その時、ポーランドの友人がアウシュヴィッツに連れていってくれました。そこを見た後、僕は気分が悪くなり、食事もできなくなってしまいました。その時も、ヒロシマを思いだしていました。

僕はヨーロッパで二人の心から尊敬すべき師に出会えました。一人は、韓国人でドイツ国籍をもつ尹伊桑（ユン・イサン）。彼は独裁政権のなかで抵抗し、一度は死刑の判決を受け、獄中で精神の自由を証明するオペラを書いた人でした。彼は僕が彼のもとをはなれるときに、こんな言葉をおくってくれました。「君には、世界の人類のなかには、今も正義のために命を失っている仲間がいることを忘れないでほしい。世界の平和のために働ける作曲家になってほしい。」今の日本の状況から考えると、別の星の人からの言葉に響く、この言葉は僕の心に深く残っています。

もう一人の師は、クラウス・フーバー。彼は、南米の政治的な圧制のために嘆く人々のために長大なオラトリオを書き、音楽作品が社会のなかでどのような力をもちえるか、を僕に教えてくれました。ヒューマニズムというものが、どんなに深い人間性から生まれてくるかを、身をもって教えてくれました。

この二人の師のもとに、僕は11年間おり、その間にも、「ヒロシマ・レクイエム」の構想は少しずつ育っていったのです。それは壮大なもので、とてもこれを実現して、演奏してくれるような団体は見つからないだろうと思っていました。

僕と同世代の尊敬する指揮者、今村能君から新響のために何か新しい作品を書いてくれないかと、たのまれた時、僕はこの「ヒロシマ・レクイエム」の構想を今村君に伝えました。今村君は、僕のこの夢を新響に伝えてくれ、新響の人たちは、積極的にこの夢の実現に参加してくれました。

作曲がはじまると僕の音楽の編成はふくれあがり、朗読者、合唱、児童合唱、テープ、声楽、ソリストと、次々に新響の方々をおそれさせる要求がでてきました。それを新響の方々はすべてひきうけてくださり、このヒロシマ・レクイエムのために奔走してくださいました。

おまけに作曲はおくれ、練習開始の５月の連休の合宿のときは、Ⅰ章の前半部分のみ完成しており、それを練習しつつ、作曲をすすめるという、僕にとってもはじめての体験が始まりました。プロのオーケストラの練習は、本番の２、３日前のほんの２、３回、全部で一時間と少しという場合が、ほとんどです。しかし、新響の場合は、ほぼ３カ月間、毎週２時間ほど練習してくださるのです。しかもこの練習のおりに、実に多くのことを新響のみなさんは教えてくださいました。打楽器の方には、楽器さえ作ってもらったのです（二楽章のくさりの音は、新響の方の制作したものです）。このように、毎週、いろんなことを教えていただきつつ、作曲を続けていったのです。

作品は二楽章からなり、Ⅰ楽章〈前奏曲・夜〉は、オーケストラのみで、この楽章だけ独立して演奏することも可能です。危機的な洪水がおそってくる、

大きな波がおしよせてくるイメージです。スコアの表紙には、次の言葉が引用されています。

〈カオスから幽冥（エルボス）と暗い夜が生じた
つぎに夜から澄明（アイテル）と昼日（ヘメレ）が生じた
夜が幽冥と情愛の契りして身重となり
生みたもうたのである〉

ヘシオドス～神統記より～
（岩波文庫）

〈神よ、わたしをお救いください。
大水が流れ来て、わたしの首にまで
達しました。
わたしは足がかりもない深い泥の中に
沈みました。
わたしは深い水に陥り、大水がわたしの
上を流れ過ぎました。〉

詩篇69～ダビデの歌より～

Ⅱ楽章、〈死と再生〉は、ラテン語の死者ミサの遠くから響いてくるコロスの声と、原爆を体験した子供たちの手記――「原爆の子」長田新編（岩波書店）――が交互にあらわれてくる構成になっています。「原爆の子」を使ったのは、ちょうど僕の母の世代が、「原爆の子」の世代であったからです。彼らの声を響かせる場所をつくりたかったのです。言葉の意味よりも、むしろ、彼らの声、叫び、うめきをもう一度聴きたかったのです。彼らの朗読に背後の打楽器から、軍靴の行進を想像させるくさりの音と、黙示録的なトランペットが響きはじめ、無垢（イノセント）なものが、暴力的に押しつぶされていく世界が描かれます。

最後には、未来への願いをこめた児童合唱が「怒りの日」が来ることを暗示するのですが、それもオーケストラのトゥッティで断ち切られてしまいます。（ちょうどこの最後の部分を書いている時、中国で天安門事件が起き、多くの若者が惨殺されました。）

音楽作品は、決して政治的なメッセージを伝えるものではなく、もっと身体全体で体験する質的な事件です。だから、この音楽を通して反核を声高に叫んだり、軍縮をうったえたりしたくはありません。僕の音楽は、僕の心に生まれたヒロシマの経験から生まれた様々な声が、音楽というかたちをもって響き渡ってくれるものであってほしいのです。その音体験は、政治の世界の言葉よりもっと深い場所で響き、僕たちの心の奥底の領域を解放するものであってほしいのです。

この作品のⅠ楽章は、僕の精神的な師の一人である中村雄二郎先生のリズム論に深い影響を受けました。また全体は、大江健三郎氏の様々な著作に強く影響されています。

「原爆の子」のテキストの使用を許してくださったばかりか、励ましの御言葉までいただいた長田五郎さん、岩波書店の大塚信一さんには心から感謝しています。

この音楽の生みの親である、新響のみなさん、作曲の期間中、ずっと暖かい励ましの言葉をかけて、しんぼう強く完成を待ってくれた今村能君、合唱指揮の田中信昭先生、合唱団OMPのみなさん、東京少年少女合唱隊のみなさん、フォンテックのみなさんに心から感謝いたします。

残念ながら、作曲者の僕は初演の日、フィンランドのクフモ音楽祭で、ちょうど同じ日にコンサートがあり、初演に立ちあえません。どうか、お許しください。白夜の国から、演奏会の御成功を祈っております。

この「ヒロシマ・レクイエム」を、創始者である芥川也寸志氏を失って深い悲しみのなかから新しい胎動を始められている新交響楽団のみなさんと、ヒロシマを体験しながらも、新しいヒロシマを再生させた僕の両親の世代に心からの感謝をもって捧げます。

―1989年7月7日―

楽器編成：フルート3（2・3番ピッコロ持替、2番アルトフルート持替）、オーボエ3、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、トランペット3、ホルン4、トロンボーン3、テューバ、エコーⅠ（遠方でトランペット、ホルン、トロンボーン各1）、エコーⅡ（Ⅰと同じ編成）、打楽器Ⅰ（大太鼓、大タムタム、トライアングル）、打楽器Ⅱ（吊りシンバル4、ムチ、小太鼓、ラチェット、グロッケンシュピール、ゴング――深い音の出るもの、ウッドブロック3、マラカス、石）、打楽器Ⅲ（大太鼓、大タムタム、マリンバ、アンティックシンバル、トムトム）、打楽器Ⅳ（ヴィブラフォン、ゴング――深い音の出るもの、ギロ、ライオンズロアー――ライオンの吠える声の出る太鼓、マラカス、小太鼓、トムトム、石）、鎖2（遠方で）、弦楽器（16・14・12・10・8）

原爆の子

以下は長田新編「原爆の子」からの抜粋。「ヒロシマ・レクイエム」第Ⅱ部の中で朗読されます。

関本　幸夫（小学校５年・当時満５歳）

僕が、そとであそんでいると、ひかった。もんと僕のいえは、いつのまにか、まるやけに、なっていた。僕は、あのときには、かなしかった。それから、僕たちは、すぐに、はしのしたに、いった。はしのしたに、いったときには、人たちはみんな、やけどして、しにそうなかった（であった）。僕は、かなしかった。それから、僕たちは、向うぎしにいった。そのひとばんは、そこでねた。

あくるひ、僕らは、おなかがすいたので、おねえちゃんが、すぐにみささばしの学校にいって、おにぎりを、もらってきてもらって、それをたべました。それから、僕らは、おねえちゃんといっしょに、そこらを、うろうろしていると、うしろから、おとうちゃんと、おかあちゃんとが、はしってきた。おかあちゃんは、ても、あしも、やけどをしていた。おとうちゃんは、そのまま、もうしにそうに、なっていた。それから、僕は、おとうちゃんをみて、ないた。そのときは、僕は、ほんとうに、かなしかった。それから、僕らは、おとうちゃんの、かいほうをした。そのときには、もうおとうちゃんは、しにそうになっていた。僕は、すぐに、コップに、おみずをくんできて、のますと、おとうちゃんは、いきかえった。

それから僕らは、みんなといっしょに、しんるいにいった。しんるいにいってから、僕らはそこに、とうぶんとまった。それから、二三日たってから、いえをたててもらって、いえができた。それから、そこでくらした。

それから僕らは、山にいって、あそんだ。山からかえってからすぐ、おねえちゃんといっしょに、おつかいにいった。おつかいから、かえっえみると、そのときはもうおとうちゃんは、しんでいた。僕らはすぐに、おとうちゃんを、おかんにいれて、やきばにつれていって、かえった。それからおとうちゃんの、ほねをもらって、すぐに、はかばにうめた。

二三日たってから、おかあちゃんも、しんだ。おかあちゃんもまた、おかんのなかにいれて、やきばにつれていった。おねえちゃんといっしょに、おかあちゃんの、ほねをもらって、おとうちゃんのはかばにいって、おがんで、それから、ふたりきりで、ないた。

山にくりを、ひろいにいった。くりをひろってから、いえにかえって、ゆでた。くりを、おはかにもっていって、おとうちゃんと、おかあちゃんに、あげた。それから僕は、川に、かいひろいにいった。かいひろいがおわってから、すぐにいえにかえって、おねえちゃんに、ゆでてもらってから、たべた。おねえちゃんと、かいをもって、おとうちゃんのはかに、いっておがんだ。

それから、僕はおねえちゃんといっしょに、まちまでせんこうを、かいにいった。おつかいから、かえってから、おねえちゃんは、すぐにせんこうをもって、はかばにいった。

松永　瑛子（高等学校２年・当時小学校５年）

「お母ちゃん、どこ？」

私は声の近くへ近くへと行った。屋根の下になった母はトタンのようなものを中から叩いていた。けれどもその声はだんだんと細くかすかになっていく。私の力は全然なく、大きな壁や柱やガラスを、どうして持ちあげられるであろう。思わず泣き声になって言った。

「お母ちゃん、出せんよ。大きな屋根や柱や二階があって……。」

母の声は消えた。私は別に悲しいとも、出したいとも考えなかった。ただ茫然と、つっ立ったまま屋根の中を見ていた。コツコツと叩いていた音も、もう聞えなくなった。

「瑛子ちゃん。」

兄の声がかかった。腹部に盲腸を手術したように長さ十センチ位の深い傷があって、力を入れる度にタラタラと血が流れ落ちた。内臓が露出して、真赤な血が噴き出し、別人のように思われた。姉は気分が悪いと言って坐り込んでしまった。父はやっと下からはい出したところであった。

母を助け出そうと言いかけた時、兄は

「さあ、早く逃げんと、みんな焼け死んでしまう。さあ、早く早く。」

と私達をせき立てた。私があたりを見渡した時、火は前よりも一層大きな火の波となり、私達四人に襲いかかってきた。

内藤　成敞（小学校６年・当時満６歳）

ぼくも母も血だらけになっていた。台所は半分つぶれかけた。すると母がおそろしさのため、ぼくの手をひいて、げんかんにつれていった。げんかんは、ふさがっていた。そのとき見えたのは、庭のかきがこわれていることだった。母とぼくとはいそいで、外にでた。あたりの家は、むざんにこわれていた。土手の道に出た。道にそっているへいが、たおれていた。母はそのへいの中をむいて、助けをもとめた。すると土手で、兄さんが、おそろしさといたさのために、泣いていた。

ぼくはいそいで、兄さんのところへいった。見たところは、なんでもなさそうだったが、やけどをしているらしかった。ぼくはちらりと川を見た。すると死体がプカプカ流れていた。兄さんは、

「眼を洗う水を、くんできてあげようね。」

と母やぼくに、しんせつにいってくれた。兄さんは、こわれた台所にいって、水をくんできてくれた。ぼくと母は手や顔を洗った。兄さんは、体を左右の二つにわけて考えると、その右の方をやけどし、左の内がわもやけどをしていた。

その日のおひるすぎ、父がけがをして、学校から帰ってきた。父のつとめている学校は、ガス会社のむこうがわに

あった。父は下じきになったが、大ごえで助けをもとめたら、すぐにたすけてくれたので、無事だったといわれた。近所のおじさんも、兄さんのように、せ中にやけどしていた。それで兄さんは、おじいさんといっしょに、今の県病院にいってアブラをぬってもらって、かえってきた。その日の晩、兄さんの体はものすごくはれあがった。まるで金仏さまのようだった。

それから毎日父母が兄の手あてをした。どんなに手あてをしても一向よくならず、毎日熱が高かった。食べものも、とっておきのお米で、おかゆをたいてあげた。それでもあまりよろこばなかった。父母もきずをしているし、お医者もないし、薬もなく、とても困ってしまった。

十日程して段原の一高が野戦病院になっていたので、家中で兄さんをタンカにのせて連れていった。そこではひどいやけどの人々が、どの教室にもいっぱいに、ごろごろねたり、おきたりしていた。みんな赤チンや、白いなんこうをぬっていて、赤おにのようなすがたで、手をおばけのようにして、大声で泣いたり、うなったりしていた。兵隊さんが手あてをしていた。消毒薬のつよい香りと、うみのいやな香りとで気持が悪く、配給のおにぎりも、あまりおいしくなかった。兄さんは食事も進まず、段々悪くなっていった。やけどはどろどろにうんだ。すこしもよくならず、下痢も一日に何回も出た。妹まで下痢がひどくて、どうしようもなく、困ってしまった。それからカンフルやビタミンを毎日注射していた。それでも、ぼくは病気のひどい兄さんと、けんかをするときもあった。

「治ったら、ブシャゲルゾ（やっつけるぞ）。」

と言った。けんかをしたその晩、とうとう死んでしまった。

死ぬ前の体は、うんでいて、その中にうじ虫がはいっているくらいに、みじめなものだった。兄さんは、きっと治ると思っていたが、死んだので、本とうにかわいそうだ。今ごろ兄さんの同級生を見ると、本とうに悲しくなる。

戦争なんて全くきらいだ。父母もどんなに、つらかったであろうか。たくさんの死んだ人々のためにも、世界の平和をいのっている。

坂口　博美（高等学校２年・当時小学校５年）

八月六日、その恐るべき日、原子爆弾は私を孤児の世界へ追いやってしまった。あの時の、あのすさまじい閃光、大地もゆれるあの轟、そしてあのどす黒い悪魔のような原子雲、私は広島の町から40キロ離れた田舎で見た。そして、その一瞬すでに、父も母も兄も、姉もそして妹も、また親愛なる友も死んでしまったことを知らないで。

私の家は爆心地の細工町にあった。家族は父母と兄弟とで７人だった。しかし、幸か不幸かその年の四月、私は集団疎開で、父母のもとを離れて山県郡のＨ村に疎開した。それが家族との最後の別れだったとは……。

家族が全滅したのを聞いたのは、原爆のあったひと月後の九月七日の夜であった。その夜、突然呉の叔父が、私の疎開先のＳ寺に訪ねてきた。そして私を見るなり、靴も脱がずに家族の死を知らせた。私は泣いた。声をあげて泣きつづけた。先生も泣かれた。寮母さんも、エプロンを顔にあてて泣いていらっしゃった。その時の私の気持は、あまり打撃が大きかったためか、悲しいとも淋しいとも感じなかった。ただやたらに泣きつづけるだけであった。その夜私は、叔父と枕をならべて寝た。たくましい叔父の体が、父のように見えた。父の顔、母の顔、そして兄・姉・妹のなつかしい顔、私は幾度となく想いをはせた。しかし、その懐かしい顔が、永久にこの世から消えていったのだと思うと……。「嘘だ」「嘘だ」幾度か思った。しかしあの時見た恐ろしい悪魔の正体は、私の考を打消してしまった。

矢口　久代（高等学校２年・当時小学校５年）

頭髪はだらりと顔面にたれ、体は火傷で真赤にただれ、裸体の人がほとんどです。そんな人達が、のろりのろりと歩きながら、道端に一人倒れ二人倒れて行くのです。川にも畠にも、牛と人間が一緒になって倒れているのです。中でもお腹に赤ちゃんのあるらしい女の人が背中全体に火傷を負い一糸まとわず橋のそばに倒れておられたのは、本当に恐ろしい悲しい姿でした。でも、みんな自分一人で手一杯なのです。自分の命のみを求めて逃げて行くのです。

横川の方はめらめらと炎がもえ上っています。私と賢ちゃんは、引きつった手足の不自由さからびっこを引きつつ、やっと打越の家にたどりつきました。打越の家も山と反対側になる東の屋根は全部ふきとび、建具もなく、台所の道具など、家の柱と床をのぞいた他は、全部とんでしまっています。後の山の大木は倒れて、道ばたにころがり、足をふみ入れる所もないといった状態です。家族は、おばさんと姉さんを除いた他は、全部集っていました。でも、みんな身うごきの出来ない程ひどい火傷や怪我をしているのです。勤労奉仕に行った兄は、目の前に焼夷弾がおちたのだと言っていたが、顔を丸焼きにしているのです。私は一目見て、もう二度とふり向く事が出来ませんでした。

木村　　暹（高等学校２年・当時小学校５年）

その時だ、あの広島市三十万の人々の命をさらった爆弾が破れつしたのは。

強い光が窓ごしに目に入った。そしてそれは赤から黄に、まるで花火のように光った。あたりは一しゅん真暗になり、一寸先も見えない。僕は「お母さん」と母にとびついて、抱きあったままで、あの一しゅんが過ぎていった。まるで十年間が過ぎたように、長い長い時間であった。二三分過ぎたろうか。僕の目はようやく物が見えるようになった。家はこわれ、壁は倒れ、戸は破れていた。母はだまってあたりを見まわし、「このままではあぶないから外に出よう」といった。

僕と母は家からはい出た。そこは、今まで見たこともない、聞いたこともないような世界だった。僕は人間か何かわからないようになった人間の肉体を見てしまった。母は「見てはいけない」といって、僕の目を両手でふさいだ。だが僕は、母の手を押しのけて、おそるおそるあたりを見まわした。道路にはもう人間の山がきずかれており、人々は死にもだえている。ふと我に返って自分を見つめた。傷一つしていない。母もどこも傷をしていない。僕はしばらく、ぼう然と門の前に立っていた。母親らしい女の人が体中血だらけになって、子供の名を呼びながら走っていた。

新響と「ヒロシマ・レクイエム」——ある音楽の誕生に立ち会う

今尾　恵介(打楽器)

新響がこの曲の練習を始めた頃は、実はまだ第1楽章のⅠ部が完成しているだけだった。従って5月に行われた茨城県鹿島での合宿ではこの5分ほどの部分を練習することになった。細川さんは、この、わずか5分間ではあるが、作曲者にとって非常に重要な意味をもつ部分の音楽をわれわれに伝えるために2泊3日の合宿の全日程に参加した。氏の友人であり、現代音楽の先駆的奏者であるコントラバスの溝入敬三さんを伴って。

合宿の初日の晩、シューマンの合奏が終わった後で溝入さんはクセナキスともう一人、現代作曲家(失念)のコントラバスのための独奏曲を団員たちの前で演奏した。ティンパニのマレットでコントラバスの胴を叩いたり、叫んでみたり、ありとあらゆる奏法が目まぐるしく飛び交った。どちらかというと、新響の団員もやはり普段はいわゆるクラシックを聴く人がほとんどだ。あっけにとられて演奏に見入る(聴き入る、というよりも)われわれを前にして細川さんは「とにかく、聴いて下さい、それから、可笑しかったら、どんどん笑って下さい」と言った。

現代音楽は理屈で聴くな、というのはよく言われることだ。とはいえ日頃から「現代音楽はどうも奥が深そうでヘタなこと言ったら……」という教養(!)がつい邪魔してしまうわれわれは(みんなひっくるめてすみません)、ともすれば後で感想文を書かされる運命にある小学生のクラシック音楽鑑賞のような気分になってしまうのである。しかし少なくともこの晩の作曲者とその仲間による計略(?)は見事成功したようだ。この効果はさっそく合宿2晩目の大宴会でホルンの超現代奏法(?)が登場したことを見てもうかがえた。

管楽器は曲の最初、いわゆる普通の音を出さない。マウスピースに息を吹き込むフーッという音だけ。首をかしげつつ、慣れぬ楽譜の指定にまごつきながらも曲は進んでいく。少し行ってはどこかのパートの誰かが質問をする。細川さんはそれに少しの迷いも見せず、自身の中に確固としてある音のイメージを団員に言葉で伝える。言葉でだめなら今度は溝入さんが楽器で実演。5分の曲に、いや、その音色についてこれだけの時間をかけて練習したことが今までにあっただろうか。

第1楽章は「圧倒的な洪水に飲み込まれる破局」のイメージがあるという。細川さんは「これは波です」という。演奏している方は譜面についていくだけで手一杯なところがあるから、どうも全体を見渡せないで困ることも多かった。ある管楽器吹きは「何が何だかさっぱり分からぬ」とも言った。

私は打楽器だが、ある時、他の人に自分のパートを任せて、1歩下がって後ろの方で聴いてみた。波が聞こえた。中に入って演奏している時には気がつかなかったのが、後ろに下がって聴いたらオーケストラの中で波が寄せては返している。今、目の前で行われている創造行為に自分が参加している幸運を感じずにはいられない。

作曲と練習は同時進行していった。今週はスコアは間に合ったけどパート譜がまだ、ということで急遽スコアの切り貼りを徹夜でやった団員もいた。きのうできたばかりのスコアやパート譜で初めて合わせる。世界で初めて音が出る。細川さんはほぼ毎回練習に立ち会い、「現場監督」としてわれわれにさまざまな表現を求めた。

「もっといろいろな音が出るはずです……」

第2楽章「死と再生」を初めて合わせたのは本番3週間前の7月1日であった。この時に、軍靴を象徴する鎖が入った。オーケストラのテンポとは全く関係なしに何もかも蹂躙し、たたきつける恐ろしい響き。

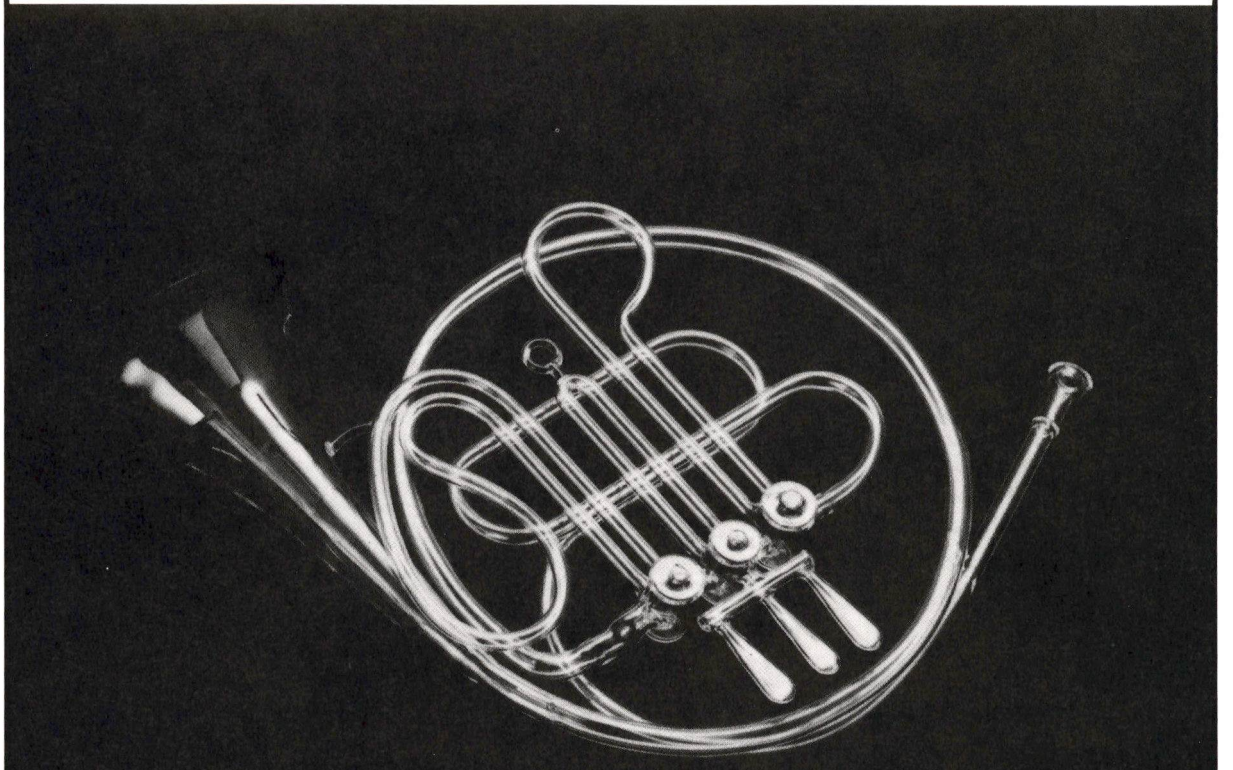
「ヒロシマ」とカタカナで書くと、あるイメージがこの国の人々の胸には去来する。ヒロシマ→反核→反米→共産主義→就職に不利、という具合に。「音楽は政治とは関係なくありたい」「客観的に、普遍的に、不偏不党で……」。ごもっとも。しかしそんなに「無味無臭」が好きなら、そういう人は文部省検定済教科書のような音楽とつきあった方がいいのではあるまいか。

いい器には豊かな表情がある

SASAKI
CRYSTAL

感性と技能の調和から生活を彩り、味わいを深める
美しさと、個性を備えた商品を佐々木硝子は、
おとどけしてまいります。

光のすきまを優しい風が吹きぬけたとき
クリスタルの輝きがかもしだす、透明な音色が
皆さんの心に響きます。



ガラスの楽器コレクション　ホルン
試作品　硼珪酸ガラス

佐々木硝子株式会社
〒103 東京都中央区日本橋馬喰町2-2-6 ☎(03)663-1211

細川俊夫を語らずして現代の音楽を語ることはできない



オブジェ：宮脇愛子「うつろひ」
(Photo=Shuji YAMADA)

細川俊夫作品集

▼今秋第III集発売予定

うつろひ——音宇宙I



「うつろひ」 笙とハープのための❶
「恋歌」 ソプラノとギターのための❷
「線」 フルート・ソロのための❸
長澤真澄❷佐藤登和子 田部井辰雄❸ピエール・イヴ・アルトー

CD FOCD3211 税込定価三、〇〇八円（税抜価格二、九二〇円） エッセー・中村雄二郎〈公芸特選〉

ペル・ソナーレ——音宇宙II（レコード・アカデミー賞受賞）



「線」II－チェロ・ソロのための❶
「時の谷間に…」－弦楽四重奏とピアノのための❷
「遠景」I－オーケストラのための❸
フルート協奏曲「ペル・ソナーレ」❹
❶ミヒャエル・バッハ ❷辰巳明子 梅原ひまり 白尾偕子 苅田雅治 木村かをり
❸山田一雄／新星日本交響楽団 ❹ヒエール・イヴ・アルトー 大友直人／日本フィルハーモニー交響楽団

CD FOCD3225 税込定価三、〇〇八円（税抜価格二、九二〇円） エッセー・北沢方邦

芥川也寸志の世界



以上各 税込定価三、〇〇〇円（税抜価格二、九一三円）

好評発売中

第一集 芥川也寸志／管弦楽選集（続）
交響三章（一九四八）
＊コンチェルト・オスティナート（一九六九）
アレグロ・オスティナート（一九八六）
武蔵坊弁慶（一九八六）
芥川也寸志指揮 新交響楽団
＊山岡重信指揮 安田謙一郎－チェロ
FOCD3243

第二集 早坂文雄／管弦楽選集
古代の舞曲（一九三七）
左方の舞と右方の舞（一九四一）
映画「羅生門」より五曲（一九五〇）
管弦楽のための変容（一九五三）
芥川也寸志指揮 新交響楽団
FOCD3244

第三集 伊福部 昭／管弦楽選集
交響譚詩（一九四三）
タプカーラ交響曲（一九五五／七九）
ヴァイオリン協奏曲第2番（一九七八）
芥川也寸志指揮 新交響楽団
小林武史・ヴァイオリン
FOCD3245

第四集 日本の交響作品展
小倉朗／オーケストラのための舞踊組曲（一九五三）
平尾貴四男／古代讃歌（一九三五） 菅原明朗／アコーディオンのための協奏交響楽（一九七九）
松平頼則／南部子守唄を主題とするピアノとオルケストルの為の変奏曲（一九三九） 片岡良和／抜頭によるコンポジション（一九六一）
芥川也寸志指揮 新交響楽団
御喜美江・アコーディオン 土屋律子・ピアノ
FOCD3246

第五集 ソヴィエト・中国交響作品展
ショスタコーヴィッチ／交響曲第四番 ハ短調 Op.43
李煥之／春節序曲 大秧歌
呉祖強／二泉映月
芥川也寸志指揮 新交響楽団
FOCD3247

本日会場にて
即売中



芥川也寸志／管弦楽選集

（第25回レコードアカデミー賞受賞）
交響管絃楽のための音楽（一九五〇）／絃楽のための三楽章（一九五三）
交響曲第一番（一九五五）／エローラ交響曲（一九五七～八）
芥川也寸志指揮 新交響楽団
CD FOCD 3208 税込定価三、〇〇八円（税抜価格二、九二〇円）

株式会社
フォンテック
〒167 東京都杉並区
荻窪5-22-5
Phone 03-393-0183
FONTEC RECORDS


50th
ANNIVERSARY
JASRAC 1989
音楽、すくすく。
著作権が育てる、
かけがえのない音楽
植物がすこやかに育つには、水や光が必要なように、音楽がすこやかに育つには、著作権がしっかりと守られることが大切です。
JASRACはやがて創立50年——ひたすら著作権を守り、音楽を育てていきます。
JASRAC
日本音楽著作権協会
理事長　石本 美由起
〒105 東京都港区西新橋1-7-13 ☎(03)502-6551

BUNKYO 〒112東京都文京区小石川2-1-11☎03(811)2084
世界の名器を常時、多数在庫いたしております。



Pygmalius DX-117¾

外観の美しさ、曲線の至上美、
完璧な音色——ピグマリウス。

Pygmalius

Violin. Viola. Cello. Bass.